

### 三等 紅ちゃん朝顔

福 山 隆

朝顔の種子の紅ちゃんホンは、まあるい／＼お顔をして、なんにも知らずに、ぐつすりおねんねをして居ましたの。

するさ、さてもやさしい聲で、春風の小母さんが「紅ちゃん！紅ちゃん!!もうおつきなさいな。白ちゃんバイも青ちゃんチンも、もうさうにお目を醒ましてよ」さ着て居た上のお蒲團をスーッスーッ撫でましたから、紅ちゃんは

「ウム、ウー」さ云ひ乍らお目をあけて、上のお蒲團をバツッはいでひよつこり起き上つて見ますさ、お兄ちゃんの白ちゃんもお姉ちゃんの青ちゃんも、にこ／＼してこつちを見て居ますから、紅ちゃんは少し恥かしくなつてもぢ／＼してしまひましたの。

「お早う」

お兄ちゃんの白ちゃんは元氣な聲で呼びかけて呉れました。

「あらお寝坊ちゃんね」

お姉ちゃんの青ちゃんは嬉しさうに體をゆすぶりました。

それから毎日、ぼか／＼さ暖いお日様が照らして下さいましたから、三人はずん／＼大きくなつて可愛い葉つばがもう大分大きくなつて來ました。

でも、をかしい事には紅ちゃんも白ちゃんも青ちゃんも、大すきな坊ちゃんやお嬢ちゃん達

を、まだ一度も見ることが出来ません。

「さうしたんだらう」さ紅ちやんは不思議さうに云ひました。

「本當にさうしたんだらう」さお兄ちやんも云ひました。

「此處はたしか幼稚園のお庭の筈なんだけれぎ」

さお姉ちやんも云つて居ます。三人は何か知ら淋しくて毎日「明日は」明日は」さ待つて見ましたけれぎ、なかなか人の影を見る事が出来ませんでした。

其のうちに、いつだつたか薄黒くよごれた猫の小父さんが、のそりくさ通りかゝりましたから、紅ちやんは思はず大きな聲で

「小父さん、小父さん」さ呼びかけますさ、猫の小父さんは、キラリさ光る目をこつちへ向けて、「何だい」さつまら無ささうに云ひました。紅ちやんは吃驚しましたけれぎ、

「小父さん！ 此處幼稚園のお庭でせう、それにだあれも出て來ないのよ、さうしたんでせう」さうむ、幼稚園のお庭には違ひ無いけれぎ、誰も居やしななさ」

さ云つて向ふの方へ行つてしまはふさしますから紅ちやん達はもう一度大きな聲を出して、「あつ小父さん、待つてよ、少し待つてよう」さ云ひました。

「さうして誰も居ないの？」

「さうしてつて、戦争があつたんだよ。」さ小父さんはやつさそれだけ云つてうるささうに、さうさ行つてしまひました。

「戦争！」

三人はさても吃驚してしまひましたの。だつて此の間迄何も知らずに土の中におねんねしてゐたんですもの、飛行機が雷様の様な音をたてて空中戦をしたり、戦車がさうさくさくさお家も塀も道も木もゆすぶり乍ら通つて行つたり、海みたいな大きな楊子江かはの濁り水の中にか

くれて居る危ない、水雷を爆發させながら、ぐんぐん進んで来た軍艦の事も、十日も御飯を食へずに生のお芋許りかぢりながら、ひざいお道を歩いて来た兵隊さんやお馬ちやんの事なごもちつごも知りませんでしたからね。

「ねえ白ちやん、戦争つてこわいものなんでせう」

「うんどうしようか知ら」

三人はまだあんまり長くなつて居ないお手々を伸してぎゆつぎつなぎあひました。斯うして居れば少しはこわいのが忘れられるからです。

それから暫くたつた或日、お庭の向ふの方がさても賑やかになりましたから、紅ちやん達は何が始まるのかと思つて、そつ草の蔭から覗いて見ますと、可愛い、子供達が澤山集つて来て嬉しうにしてゐます。

「おや」

紅ちやん達は思はず聲を立てました。何故つて、青い支那服を着た子供の姿は一人も見えずみんな、日本の子供達許りだつたからです。

「怖いわ、怖いわ」「いまにちぎられてしまふかも知れない」

三姉妹三人は草の蔭に小さくなつてかくれて居ました。

「ちりーん、ちりーん」

さういふ鐘が鳴りました。がや／＼／＼／＼聴えて居た子供達の聲がびつたり止んでお行儀よくお庭に並んで居るのが見えました。さ、「キミガヨーハー」高い竿を新しい日の丸がスル／＼と昇り始めました。小さいお手々をきちん／＼両脇に垂れて子供達は誰一人身動きもせず昇るお國の旗を見上げて歌ひました。草の蔭から覗いて居た紅ちやん達が此の様子を見てそんなに驚いた事でせうか。

それから毎日幼稚園のお庭は賑やかでした。お砂遊び、鬼ごっこ、兵隊ごっこに飛行機飛ば

し、まゝごま、繩飛び、お國を遠く千里離れて来て居るやうな氣もせず、子供達は皆元氣で  
びました。

お庭の隅にびく／＼しながら暮して居た紅ちやん達が、鬼ごつこをして走つて来た一人の男  
の子に見つけ出されたのは其の頃でした。

「オーイ、みんな来てごらんよ、こんな所に朝顔が生えて居るよ」

「あつ可愛い、朝顔だね」

「お手々ないでるわ」だあれも可愛がつて上げる人がなかつたからかも知れないわね」

「うん、さう／＼棒を立てて、上げようよ」

みんなはばら／＼走つて行つて、なるべくきれいな棒を見つけて来ました。「うん、うん」  
と、小さいお手々に力を込めて、みんなは一生懸命に竹の棒を立てたのです。

「さあ、こつちへおつかまりよ、朝顔ちやん」そんな所からんでるたらだめぢやないの」  
「さうつゝしてあげないとお手々が痛いわよ」「出来たよ」「出来たわ」

と子供達は本當に一生懸命でした。

いぢめられて、ちぎられるかと思つて居た紅ちやん達は、きれいな手頃な竹の棒を立て、も  
らつて、まるで夢の様でした。うれしくて／＼たまりませんから、一人でにす／＼／＼  
伸びて行つて、もうぐる／＼／＼竹の棒をからんで上の方迄行つてしまひましたの。

そして紅い花が咲きました。白い花が咲きました。お空の色の青い花も咲きましたの。  
恰度、紅ちやんのお母さん達が咲いた様に紅ちやん達も今こんなに美しく咲いたのです。

「もう先此處のお庭で、斯うして、紅や白や青のきれいなお花を見て喜んだ、お名前も知らな  
い支那のお友達は、今ごろさうして居るか知ら、でも貴方達の可愛がつたお花を私達も可愛が  
つて上げてゐるのよ」と、毎日子供達は胸の底でさう思ひ乍ら紅ちやん達をながめました。

おはり